

報 告

早期療育に通う子どもをもつ両親の
療育への思いと育児ストレス大塚 景子¹⁾, 堀田 法子²⁾

〔論文要旨〕

早期療育に通う子どもをもつ両親の育児ストレスに関連する要因、および療育への思いと育児ストレスの関連を明らかにすることを目的に調査を行った。育児ストレスは、父親より母親の方が高く、育児ストレスの関連要因は父母で異なることが明らかになった。また、療育への思いは、父親より母親の方が必要であると思っており、療育への思いと育児ストレスとの関連では、療育が必要であると思っている親の方が育児ストレスが高いことから、子どもの問題に真剣に向き合うその思いが育児ストレスにつながったと考えられる。

Key words : 育児ストレス, 両親, 早期療育, 発達障がい, 障がい

I. はじめに

家事や育児負担は育児ストレスの原因とも言われており¹⁾, 健常児をもつ母親の育児ストレスには、父親のサポートや子どもの発達などが影響していること²⁾, 父母の育児ストレスがお互いに関連し合うことが明らかになっている³⁾。これらより、育児ストレスに対する支援は母親のみならず、父親や家族全体に対して必要であることが報告されている。

障がい児をもつ家庭の場合、母親は主な介助を行うことが多く、育児負担がさらに増加していることから、障がい児をもつ母親の育児ストレスは健常児の母親よりも高いことが報告されている³⁾。発達上の問題を抱える子どもの場合、早期療育が重要なため^{4,5)}, 診断の有無にかかわらず、療育施設で療育を受けている。実際、子どもの年齢が低く、親が十分に子どもの状況を受け入れる前に療育が開始されることも少なくないこ

とから早期療育を必要とする児の親は障がいを受容できずストレスを抱えやすいことが予想される。また、療育施設への通園の付き添いなど、育児の負担は一段と母親が受けることが多いと考えられる。一方父親は、実際の療育の場を見る機会が少なく、育児に関わる時間が少ないこと⁶⁾, 子どもに生じる問題に気づく時期が遅いこと⁷⁾などから、母親に比べて療育の必要性や障がいの受容について葛藤することが考えられる。このようなことから療育の必要性に対する思いもさまざまであり、その思いが育児ストレスに影響を与えることが考えられる。しかし、早期療育を受けている児の親を対象とした育児ストレス研究は数少ない。そこで、本研究では、早期療育に通う子どもの両親の育児ストレスに関連する要因、および療育への思いと育児ストレスとの関連を明らかにし、今後の家族支援のための参考資料とすることを目的に検討した。

Feelings toward Remedial Teaching of Parents Whose Children Receive Early Remedial Teaching, and Parenting Stress

Keiko OTSUKA, Noriko HOTTA

1) 元名古屋市立大学看護学部 (研究職)

2) 名古屋市立大学看護学部 (研究職)

別刷請求先: 大塚景子 〒564-0044 大阪府吹田市南金田2-3-37-502

E-mail : keiko.snp@rice.ocn.ne.jp

[2374]

受付 11.10.31

採用 13. 9.17

II. 研究方法

1. 調査対象者

A 県内 B または C 療育施設に通う早期療育を受けている子どもをもつ両親63組である。早期療育グループとは、就園前の発達障がいの可能性のある児や発達障がいおよびダウン症等の障がいと診断された児が1グループ10名程度の集団で1週間に1～数回療育施設に通園して療育を受けるグループのことである。早期療育の内容は主に自由遊びと課題遊びである。

2. 調査期間

2009年6～11月である。

3. 調査方法

無記名自記式質問紙調査で、施設側から許可が得られた早期療育グループに属している子どもの親に対して行った。本調査の前に、3組の父母にプレテストを行った。調査の際は、実際に著者が早期療育グループの療育に参加した後、親に対して研究目的・方法を文書と口頭で説明し、口頭で同意が得られた場合に質問紙を配付し、翌週の通園時に施設に設置した回収箱ま

たは郵送で回収した。もう一方の親には説明を受けた親に依頼し、同様に回収した。

4. 調査内容

1) 基本属性

親の要因は、年齢、同居家族、家事育児に関すること等で、子どもの要因は、年齢、性別、早期療育の通園期間等である。親の要因・子どもの要因は母親のみからの回答とし、母親が調査に参加しない場合は父親に回答を求めた。

2) 療育への思い

療育の必要性を感じているか否かを「療育への思い」とした。回答は「全く必要ないと思う（1点）」～「非常に必要だと思う（4点）」の4件法とした。

3) 育児に対する姿勢

育児に対する姿勢を、1日に子どもと接する時間、育児の楽しさ、地域活動（育児サークルや親の会など）への参加の有無とした。子どもと接する時間は実時間とし、育児の楽しさは「全く楽しくない（1点）」～「非常に楽しい（4点）」、地域活動への参加は、「全く参加していない（1点）」～「非常に参加している（4点）」の4件法とした。

表1 基本属性

		N	Mean ± SD	人 (%)
年齢 (歳)	父親	24	36.6±5.5	
	母親	27	34.3±4.1	
子どもの人数 (人)		28	1.6±0.8	
療育に通う子どもの年齢 (歳)		28	2.5±0.7	
療育に通う子どもの性別	男児	28		18 (64.3)
	女児			10 (35.7)
療育に通う子どもの出生順位	第1子	28		21 (75.0)
	第2子			3 (10.7)
	第3子			3 (10.7)
	第4子			1 (3.6)
療育通園期間 (月)		28	8.3±5.5	
家族構成	核家族	28		25 (89.3)
	拡大家族			3 (10.7)
家族の協力	非常に得られている	28		7 (25.0)
	得られている			18 (64.3)
	あまり得られていない			3 (10.7)
	全く得られていない			0 (0)
仕事の有無	父親	24	有職	24 (100)
			無職	0 (0)
	母親	27	有職	4 (14.8)
			無職	23 (85.2)

表 2 療育への思い

		人 (%)	
		父親 N=24	母親 N=27
療育の必要性への思い	非常に必要だと思う	6 (25.0)	14 (51.9)
	必要だと思う	13 (54.2)	11 (40.7)
	あまり必要ないと思う	5 (20.8)	2 (7.4)
	全く必要ないと思う	0 (0)	0 (0)
	Mean ± SD (点) ※	3.0±0.7	3.4±0.6 *
Mann-Whitney U 検定		*p<0.05	
※ 1点 (全く必要ないと思う)～4点 (非常に必要だと思う)			

表 3 育児に対する姿勢

		人 (%)	
		父親 N=24	母親 N=27
子どもと接する時間	1 時間未満	2 (8.3)	0 (0)
	1 ～ 3 時間未満	8 (33.3)	1 (3.7)
	3 ～ 10時間未満	13 (54.2)	5 (18.5)
	10時間以上	1 (4.2)	21 (77.8)
	Mean ± SD (時間)	2.9±2.1	16.1±7.5 **
育児の楽しさ	非常に楽しい	6 (25.0)	2 (7.4)
	楽しい	17 (70.8)	19 (70.4)
	あまり楽しくない	1 (4.2)	6 (22.2)
	全く楽しくない	0 (0)	0 (0)
	Mean ± SD (点) ※1	3.2±0.5	2.9±0.5 *
地域活動への参加	非常に参加している	0 (0)	0 (0)
	時々参加している	2 (8.3)	10 (37.0)
	あまり参加していない	4 (16.7)	3 (11.1)
	全く参加していない	18 (75.0)	14 (51.9)
	Mean ± SD (点) ※2	1.3±0.6	1.9±0.9 *
Mann-Whitney U 検定		*p<0.05 **p<0.01	
※ 1	1 点 (全く楽しくない)～4 点 (非常に楽しい)		
※ 2	1 点 (全く参加していない)～4 点 (非常に参加している)		

4) 育児ストレス (日本版 PSI)

育児ストレスは、Abidin の Parenting Stress Index⁸⁾を基に奈良間らが信頼性・妥当性を検討して日本の親に使用できるよう再開発した⁹⁾日本版 PSI を使用した。日本版 PSI は、「子ども側面のストレス」7 下位尺度38項目と「親側面のストレス」8 下位尺度40 項目から構成されている。回答は「全く違う (1点)」～「全くそのとおり (5点)」の 5 件法とし、得点が高いほどストレスが高いことを示している。

5. 分析方法

育児ストレスと親の要因、子どもの要因、育児に対する姿勢、療育への思い、父母の療育への思いのずれ

との関連については Mann-Whitney の U 検定を行った。分析には SPSS Ver.17.0を使用し、統計的有意水準は 5 %未満とした。

6. 倫理的配慮

名古屋市立大学看護学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。調査に際して、施設長および発達相談部部长に研究協力の依頼を文書と口頭で行い、文書で許可を得た。研究協力者には研究の目的・方法を文書と口頭で説明し、口頭で同意を得た後、質問紙を配付した。質問紙には回収をもって同意の旨を明記した。調査への参加は自由意志、参加拒否の場合にも不利益を被らない、プライバシーの保護には万全を期すことを

表 4 育児ストレスの父母の比較

日本版 PSI	父親 N=23	母親 N=27
総得点 (C1 ～ C7・P1 ～ P8の和)	199.7±33.9	218.6±35.4 *
子ども側面のストレス (C1 ～ C7の和)	101.0±15.5	101.4±17.2
C1：親を喜ばせる反応が少ない	14.1±3.8	14.1±4.4
C2：子どもの機嫌の悪さ	19.1±4.2	19.3±4.9
C3：子どもが期待どおりにいかない	13.1±3.9	14.4±4.2
C4：子どもの気が散りやすい / 多動	16.9±3.1	16.5±4.2
C5：親につきまとう / 人に慣れにくい	14.4±2.1	14.4±3.6
C6：子どもに問題を感じる	12.1±2.5	13.0±3.4
C7：刺激に敏感に反応する / ものに慣れにくい	11.2±2.8	9.7±3.1
親側面のストレス (P1 ～ P8の和)	98.7±21.8	117.1±20.8 **
P1：親役割によって生じる規制	18.9±5.7	24.1±6.1 **
P2：社会的孤立	17.5±5.4	18.3±5.0
P3：配偶者との関係	9.7±3.9	11.8±4.1
P4：親としての有能さ	20.3±4.4	23.4±4.0 **
P5：抑うつ / 罪悪感	9.6±3.6	11.8±3.2 **
P6：退院後の気落ち	8.5±3.0	11.3±4.2 *
P7：子どもに愛着を感じにくい	8.3±2.2	8.6±2.1
P8：健康状態	6.0±1.9	7.9±2.8 **
Mann-Whitney U 検定		*p<0.05 **p<0.01

十分に説明したうえで実施した。なお、研究協力者に対しては、研究者や施設の強制力が働かないよう慎重に行った。

Ⅲ. 結 果

1. 基本属性 (表 1)

両親63組のうち、23組 (回収率36.5%) から夫婦で回答があった。父親のみから 1 名、母親のみからの回答が 4 名であり、父親24名 (回収率38.1%), 母親27名 (回収率42.9%), 子どもや家族に関する基本属性の回答は28名から得られた。

2. 療育への思い (表 2)

療育への思いの平均得点は、父親3.0±0.7点、母親3.4±0.6点で有意に母親の得点が高かった (p <0.05)。

3. 育児に対する姿勢 (表 3)

子どもと接する平均時間は、父親2.9±2.1時間、母親16.1±7.5時間で母親の方が有意に長かった (p <0.01)。育児の楽しさの平均得点は、父親3.2±0.5点、母親2.9±0.5点で有意に父親の得点が高かった (p <0.05)。地域活動への参加の平均得点は、父親1.3±0.6点、母親1.9±0.9点で有意に母親の得点が高かった (p <0.05)。

4. 育児ストレスの父母の比較 (表 4)

日本版 PSI (以下、育児ストレスとする) の「総得点」は父親199.7±33.9点、母親218.6±35.4点で有意に母親の得点が高かった (p <0.05)。「子ども側面のストレス」は、下位尺度も含め、父母の得点に有意差はなかった。「親側面のストレス」は、父親98.7±21.8点、母親117.1±20.8点で有意に母親の得点が高かった (p <0.01)。下位尺度では、「親役割によって生じる規制」(p <0.01), 「親としての有能さ」(p <0.01), 「抑うつ / 罪悪感」(p <0.01), 「退院後の気落ち」(p <0.05), 「健康状態」(p <0.01) で有意に母親の得点が高かった。

5. 親の要因・子どもの要因・育児に対する姿勢と育児ストレスとの関連 (表 5, 6, 7)

親の要因のうち、早期療育に通園している子どもの数は全員が 1 人であり、通園の付き添いは全員が母親であった。家族の協力の有無で父親の「協力あり」とは父親が協力をする、母親の「協力あり」とは母親が協力を受けるということである。

年齢で母親は、「40歳以上」が「親側面のストレス」で得点が有意に高かった (p <0.05)。家族の協力で父親は、「協力あり」が「親側面のストレス」で得点が有意に高かった (p <0.01)。

子どもの要因では父親は全ての項目において有意差

表5 父親母親別、親の要因と育児ストレスとの関連
父親 N=23 母親 N=27

			育児ストレス	
			子ども側面	親側面
年齢	父親	39歳以下 (n=20)	101.0±15.3	99.3±20.8
		40歳以上 (n=3)	101.0±20.1	95.0±33.0
	母親	39歳以下 (n=22)	98.8±17.4	113.1±20.9
		40歳以上 (n=5)	113.2±11.2	134.6± 7.1
子どもの人数	父親	1人 (n=13)	100.2±16.7	94.3±20.4
		2人以上 (n=10)	102.0±14.7	104.4±23.3
	母親	1人 (n=14)	105.3±19.6	121.7±19.9
		2人以上 (n=13)	97.3±13.8	112.2±21.3
家族構成	父親	核家族 (n=21)	99.6±15.3	97.7±21.4
		拡大家族 (n=2)	115.5±12.0	109.5±33.2
	母親	核家族 (n=24)	102.0±15.7	119.2±18.4
		拡大家族 (n=3)	96.7±31.5	100.3±35.6
家族の協力の有無	父親	協力あり (n=20)	103.0±15.5	103.8±18.4
		協力なし (n=3)	87.7±6.5	65.0±7.6
	母親	協力あり (n=24)	101.0±17.7	116.3±21.8
		協力なし (n=3)	104.7±15.3	123.3± 9.1
共働きの有無※	父親	共働き (n=4)	100.5±15.9	96.5±17.6
		共働きでない (n=18)	101.1±16.3	99.8±23.5
	母親	共働き (n=4)	105.0± 7.0	115.8±21.0
		共働きでない (n=23)	100.8±18.5	117.4±21.2

Mann-Whitney U 検定
※共働きの有無は夫婦で回答が得られた人のみを分析対象とした。
*p<0.05 **p<0.01

は認められなかった。母親は、療育通園期間で「親側面のストレス」が「6 か月以上」で有意に高かった (p<0.05)。

育児に対する姿勢のうち子どもと接する時間は、父母それぞれの平均時間を境として、父親は3時間未満と3時間以上、母親は16時間未満と16時間以上に分類した。

父親は全ての項目において有意差は認められなかった。母親は、育児の楽しさで「楽しくない」が「親側面のストレス」で有意に得点が高かった (p<0.05)。

6. 療育への思いと育児ストレスとの関連 (表8)

父親は全ての項目において有意差は認められなかった。「療育が必要である」と思う母親は「親役割によって生じる規制」の得点が有意に高かった (p<0.05)。

IV. 考 察

1. 療育への思い・育児に対する姿勢と育児ストレスの実態

本研究結果から両親の療育への思いは、父親より母親の方が療育が必要であると思っていたことが明らかになった。療育の通園の付き添いは全員母親であり、父親は全員が有職者であり日々の育児への関わりが少ない可能性が高いことや、療育に参加する機会が限られ児の状況がわからず療育の必要性を感じにくいことが推察される。

育児に対する姿勢では、1日に子どもと接する平均時間は、母親の方が有意に長く、橘ら¹⁰⁾の健常児の親の研究とほぼ同様の結果であった。父親は全員仕事を持ち、母親の多くが専業主婦であることが影響したと考える。育児の楽しさは、父親の方が有意に楽しいと感じていた。日隈ら¹¹⁾によると父親の育児家事行動は、

表6 父親母親別、子どもの要因と育児ストレスとの関連
父親 N=23 母親 N=27

			育児ストレス	
			子ども側面	親側面
年齢	父親	2 歳以下 (n=8)	99.6±15.9	98.6±19.6
		3 歳以上 (n=15)	101.7±15.8	98.7±23.6
	母親	2 歳以下 (n=11)	103.8±13.2	122.0±16.4
		3 歳以上 (n=16)	99.8±19.8	113.8±23.2
療育に通う子どもの性別	父親	男 (n=16)	102.4±15.7	100.9±20.9
		女 (n=7)	97.7±15.7	93.6±24.6
	母親	男 (n=17)	103.4±19.0	117.7±18.9
		女 (n=10)	98.1±13.9	116.1±24.8
療育に通う子どもの出生順位	父親	第 1 子 (n=17)	102.1±16.0	99.9±21.4
		第 2 子以降 (n=6)	97.8±14.9	95.3±24.7
	母親	第 1 子 (n=20)	102.1±19.1	119.1±21.7
		第 2 子以降 (n=7)	99.6±11.4	111.6±18.3
療育通園期間 (月)	父親	6 か月未満 (n=10)	106.7±17.3	99.9±23.6
		6 か月以上 (n=13)	96.5±12.9	97.8±21.3
	母親	6 か月未満 (n=12)	101.9±13.7	109.7±14.9
		6 か月以上 (n=15)	101.1±20.1	123.1±23.3
Mann-Whitney U 検定			*p<0.05	

表7 父親母親別、育児に対する姿勢と育児ストレスとの関連
父親 N=23 母親 N=27

			育児ストレス	
			子ども側面	親側面
子どもと接する時間	父親	3時間未満 (n=9)	101.4±14.5	90.2±24.9
		3時間以上 (n=14)	100.6±16.6	104.1±18.5
	母親	16時間未満 (n=14)	107.1±11.1	121.5±19.2
		16時間以上 (n=13)	95.3±20.8	112.4±22.1
育児の楽しさ	父親	楽しい (n=22)	101.6±15.6	98.3±22.2
		楽しくない (n=1)	88.0±0.0	108.0± 0.0
	母親	楽しい (n=21)	98.0±16.7	112.5±20.6
		楽しくない (n=6)	113.5±14.1	133.3±11.8
地域活動への参加	父親	参加あり (n=2)	109.5± 3.5	92.5±9.2
		参加なし (n=21)	100.1±16.0	99.3±22.7
	母親	参加あり (n=10)	103.2±19.1	120.3±22.2
		参加なし (n=17)	100.4±16.6	115.2±20.3
Mann-Whitney U 検定			*p<0.05	

子どもに「話しかける」、「抱っこする」、「遊び相手になる」が多いと報告していることから、本研究対象の父親も食事や排泄の世話など困難を生じやすいことより遊び相手などから楽しさを感じていたことが推察される。地域活動への参加では、父親は75%が全く参

加しておらず、母親の方が有意に参加していた。育児サークルや親の会の多くは平日昼間に開催され、父親には物理的に参加困難であると考えられる。このように育児に対する姿勢は、父親の方が子どもと接する時間が短く、その時間を楽しんでいることから、

表 8 療育への思いと育児ストレスとの関連

日本版 PSI	父親 N=23		母親 N=27	
	療育が必要である (n=18)	療育が必要ではない (n=5)	療育が必要である (n=25)	療育が必要ではない (n=2)
総得点 (C1 ～ C7・P1 ～ P8の和)	203.5±33.7	185.8±34.4	221.4±35.3	183.5±10.6
子ども側面のストレス (C1 ～ C7の和)	103.2±15.5	93.0±14.0	102.3±17.5	90.5±9.2
C1：親を喜ばせる反応が少ない	14.6±4.1	12.6±2.3	13.9±4.6	16.0±1.4
C2：子どもの機嫌の悪さ	18.9±4.6	19.6±3.1	19.5±5.1	17.0±1.4
C3：子どもが期待どおりにいかない	13.9±3.0	10.2±5.5	14.5±4.3	13.0±0.0
C4：子どもの気が散りやすい／多動	17.2±3.1	15.8±3.3	16.8±4.2	13.5±3.5
C5：親につきまとう／人に慣れにくい	14.4±2.1	14.2±2.6	14.6±3.6	12.0±2.8
C6：子どもに問題を感じる	12.3±2.4	11.8±3.4	13.2±3.4	10.5±0.7
C7：刺激に敏感に反応する／ものに慣れにくい	11.8±2.3	8.8±3.3	9.8±3.2	8.5±0.7
親側面のストレス (P1 ～ P8の和)	100.3±21.5	92.8±24.6	119.0±20.4	93.0±1.4
P1：親役割によって生じる規制	19.4±6.0	17.2±4.3	24.8±5.8	15.0±1.4
P2：社会的孤立	18.1±5.4	15.2±5.4	18.4±5.2	16.0±0.0
P3：配偶者との関係	9.7±4.0	9.8±4.0	12.0±4.0	8.5±3.5
P4：親としての有能さ	20.2±4.1	20.4±5.9	23.6±4.1	21.5±2.1
P5：抑うつ／罪悪感	9.6±2.6	9.6±6.4	12.0±3.2	9.0±1.4
P6：退院後の気落ち	8.4±3.0	8.8±3.3	11.6±4.3	8.0±1.4
P7：子どもに愛着を感じにくい	8.8±2.0	6.6±2.2	8.6±2.2	7.5±0.7
P8：健康状態	6.2±2.1	5.2±0.8	7.9±2.9	7.5±2.1
Mann-Whitney U 検定				*p<0.05

育児に対してポジティブな印象を持っていると考えられる。

育児ストレスでは、三国ら¹⁾の健常児の父母より本研究対象の父母の方が「総得点」、「子ども側面のストレス」、「親側面のストレス」の得点が高かった。健常児より障がい児の母親は発達に関するストレスが高く³⁾、診断後間もない児や診断前の児も含まれる早期療育に通う児の親においても健常児より育児ストレスが高いことが明らかになった。

育児ストレスを父母で比較してみると、「総得点」、「親側面のストレス」は父親より母親の方が高く、三国ら¹⁾の健常児の親と同様の結果であり、本対象の母親も自分自身の問題や夫婦関係などの人間関係に関わる領域のストレスが高いことが示された。

2. 育児ストレスと関連要因

親の要因と育児ストレスとの関連では、父親は実際に家事育児の協力をしている「協力あり」の育児ストレス得点が「親側面のストレス」で高得点であった。清水¹²⁾は、父親の育児ストレスの特徴として、育児をやっても母親に認めてもらえないことに対する不満や

むなしさがあると報告しており、本対象の父親も同様に家事育児に協力していても認められないことが育児ストレスを高くしたと推察される。母親は「40歳以上」の育児ストレス得点が「親側面のストレス」で高かった。村上ら¹³⁾は「体調と周囲との調整困難」は年齢が高い母親に育児ストレスが高いことを報告していることから、ADHD など多動の場合、体力も必要となり、母親の年齢が高いと身体的な疲労から育児ストレスが高くなることが推察される。

子どもの要因と育児ストレスとの関連では、療育通園期間において母親は「親側面のストレス」が「6か月以上」で高かった。療育の付き添いは父親ではなく全員母親が行っており、時間の経過（6か月以上）と共に付き添いに伴う疲労が蓄積すること、療育の場合などで他児との発達の差を実際に目にすることで母親自身にストレスが生じることが推測される。

育児に対する姿勢と育児ストレスとの関連では、父親はいずれも関連がなかったが、母親は育児の楽しさが有意に関連していた。育児の楽しさとの関連で、「楽しくない」が「親側面のストレス」で得点が高かった。楽しいと思えず育児ストレスが高い場合は、多くの支

援が必要である。育児の楽しさを実感することで愛着が育ち、障がい受容につながる事が考えられるため、育児が楽しいと思えるような働きかけが重要である。

3. 療育への思いと育児ストレスとの関連

療育が必要であると思う母親は、「親役割によって生じる規制」が有意に高く、子どもの発達に対して責任を感じると共にストレスが生じることが考えられる。こうした母親には親自身のストレスに対する精神的な支援が必要であることが示唆された。

本研究では当初、療育が必要でないと思う親の方が、障がいを受容できず通園の意義を感じないなどストレスが高くなると考えたが、療育が必要であると思う親の方がストレスが高かった。これは、子どもの発達に問題を感じ、療育が必要であると思うからこそ将来のことも視野に入れて真剣に育児に向き合っていることが推測され、その思いが育児ストレスにつながっていると考えられる。

V. 研究の限界と今後の課題

本研究における対象者は、慎重に調査を行う必要があり、対象数が少ないことから、調査結果の一般化には限界がある。また、今回の対象者には診断前や診断直後の場合があり、親の受容や診断名については確認していない。特に発達障がいとは障がいとしての認知度が低く、家族の受け入れもさまざまであることが考えられること、発達障がいの程度により、早期に集団が適さない子どももあるということから、今後は対象数を確保すると共に告知の有無や家族の受け入れ状況、診断名別、重症度別の親のストレスを分析する必要もあると考える。

謝 辞

本研究の実施にあたり、調査にご理解、ご協力を賜りましたご両親様、施設職員の皆様に心より深く感謝申し上げます。

本研究は、名古屋市立大学看護学研究科修士論文の一部を加筆・修正したものであり、一部は、第57回日本小児保健学会（新潟）で発表した。なお、平成21～22年度科学研究費補助金（若手研究（B））の助成を受けて行った。

文 献

- 1) 三国久美, 深山智代, 広瀬たい子, 他. 1歳6ヶ月児を持つ両親の育児ストレスとコーピングスタイル. 日本看護研究学会雑誌 2003; 26 (4): 31-43.
- 2) 清水嘉子. 母親の育児ストレスにおける相談と対処の実態とその関連性. 小児保健研究 2007; 66 (1): 54-60.
- 3) 刀根洋子. 発達障がい児の母親のQOLと育児ストレス～健常児の母親との比較～. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要 2002; 15: 17-23.
- 4) 鈴木宏子, 岸 千代子, 田村すすか, 他. ダウン症児における早期通園療育効果—発達検査からみた乳幼児期の発達特徴について—. 小児保健研究 2005; 64 (4): 577-584.
- 5) 文 鐘玉, 久場川哲二, 久江洋企, 他. アスペルガー障がいの2症例—早期診断, 療育の導入の必要性—. 臨床精神医学 2005; 34 (9): 1237-1244.
- 6) 総務省統計局ホームページ. 平成18年社会生活基本調査. <http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/gaiyou.htm> アクセス日時: 2011. 8. 9. 16:00
- 7) 山岡祥子, 中村真理. 高機能広汎性発達障がい児・者をもつ親の気づきと障がい認識—父と母との相違—. 特殊教育学研究 2008; 46 (2): 93-101.
- 8) Richard R. Abidin. Parenting Stress Index Professional Manual. 3rd ed. Psychological Assessment Resources, U.S.A. 1995: 1-62.
- 9) 奈良間美保, 兼松百合子, 荒木暁子, 他. 日本版 Parenting Stress Index (PSI) の信頼性・妥当性の検討. 小児保健研究 1999; 58 (5): 610-616.
- 10) 橘 千恵, 中村絵里子, 中島夕美, 他. 夫の育児家事行動の特徴と子どもへの愛着, 夫婦関係満足度との関連. 母性衛生 2008; 49 (1): 65-73.
- 11) 日隈ふみ子, 藤原千恵子, 石井京子. 親としての発達に関する研究—1歳半児をもつ父親の育児家事行動の観点から—. 日本助産学会誌 1999; 12 (2): 56-63.
- 12) 清水嘉子. 父親の育児ストレスの実態に関する研究. 小児保健研究 2006; 65 (1): 26-34.
- 13) 村上京子, 飯野英親, 塚原正人, 他. 乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析. 小児保健研究 2005; 64 (3): 425-431.

[Summary]

The aim of this study was to identify factors related to parenting stress of parents whose children are receiving early remedial teaching, and clarify the relationship between feelings toward remedial teaching and parenting stress. It was found that parenting stress is greater in mothers than fathers and that the factors related to parenting stress differ between fathers and mothers. In the relationship between feelings toward remedial education

and parenting stress, parents who thought that remedial teaching was necessary had higher parenting stress. From the above it is thought that an attitude of seriously facing children's problems is tied to parenting stress.

[Key words]

parenting stress, parents, early remedial teaching, developmental disorders, disorders